

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科) (2017.12) 平成29年度:19-20.

乳がんの手術後に治療を受けている患者のボディイメージの変容への看護援助に関する文献検討

石井 美帆, 石川 瑞季, 上田 実乃梨

# 【乳がんの手術後に治療を受けている患者のボディイメージの変容への看護援助に関する文献検討】

石井美帆 石川瑞季 上田実乃梨  
(指導：石川洋子)

## 緒言

近年、乳がん患者数は増える傾向にあり、2013年には76,839人が罹患している<sup>1)</sup>。乳がんに対する集学的治療の進歩は著しいが、その治療の第1選択は現在も手術療法であり、乳房温存術、乳房切除術がある。術式の差異に関わらず、変形や喪失によるボディイメージへの影響から、身体・心理・社会的にも大きな変化をもたらす<sup>2)</sup>。術後の患者は諸々の不安に対処しながら生活しており、心理的サポートを強く求めていることが明らかになっているため、看護介入の必要性がある<sup>3)</sup>。

本研究は、乳がん術後の患者のボディイメージとその看護援助に関して、文献検討を行い、今後の乳がん患者のボディイメージに関する研究の課題ならびに看護援助に関して課題を検討する。

## 方法

**用語の定義:** ボディイメージの定義について、斎藤らの定義<sup>4)</sup>を参考に、「自分自身の体に対する個人的な【思い】であり、これは個々人の感情や感覚、評価が反映されたものである。また、それぞれの経験や状況の中で刻々と変化を遂げていくものである。」とした。

**研究対象:** 2000年から2017年7月までの、乳がん術後患者のボディイメージの変容および看護援助に関する文献を、医学中央雑誌 Web (Version5)を用いて、看護研究、原著論文、抄録あり、研究対象者20歳以上に限定して選定した。キーワードが【乳がん】【術後】【ボディイメージ】

【看護援助】では3件、【乳がん】【術後】【ボディイメージ】では20件、【乳がん】【術後】では69件であった。この中から本研究の目的に合致しなかったものを除外し、6件を研究対象とした。

**分析方法:** 研究デザイン、年次、対象者、研究目的、方法、乳がん術後のボディイメージの変容、看護援助に関する記述を抽出した。研究デザイン、年次、対象者についてはそれぞれで分類し、ボディイメージの変容については、ボディイメージのアセスメント項目である身体的変化、心理社会的変化、認知的変化<sup>5)</sup>に基づき分類し、看護援助に関する記述については類似の内容で整理した。

**倫理的配慮:** 文献資料は公開済みのものとし、出典を明記した上で、著作権法を遵守し使用した。

## 結果

表1 ボディイメージの変容に伴う身体・心理・認知的変化と看護援助

ボディイメージの変容に伴う身体的変化	
1週間	術後による疲労感や恐怖から解放された後の疲労感を感じ、自分の身体ではないような感覚がある <sup>6)</sup> 。
退院後	日常生活に戻って改めて身体的変化に気づく。仕事など、活発的に生活をしている患者は、身体や身体の一部が自分のものではないような感覚や、自分の身体を機能的にも外見的にも自分でうまくコントロールできているという感覚、自分の体があるがままだに認め、尊重するという感覚が低下していく <sup>6)</sup> 。
2か月後	乳房の喪失感や術後の創部周囲の知覚の違和感がある <sup>7)</sup> 。再建により乳房が元の状態に近くなり、再建後1年でコンプレックスがある程度解消される <sup>2)</sup> 。
ボディイメージの変容に伴う心理的变化	
1週間	身体的変化に伴い、自分をどう受け止めたらいいかという混乱を生じる <sup>6)</sup> 。
退院後	不安や混乱の感情を抱く。一方、活発的に生活することは、ボディイメージの変容があるがままだに受け止め、自信を取り戻すことに繋がる <sup>6)</sup> 。
2か月後	日常生活や外出で自身のボディイメージを再認識することにより、さらなるショックを受けやすい心理的状態である。また、乳房の喪失感や術後の創部周囲の知覚の違和感により、不安や混乱など、精神的に追い込まれる時期がある <sup>7)</sup> 。乳がん術後患者はボディイメージの変容に伴い、コンプレックスを抱える <sup>2)</sup> 。
ボディイメージの変容に伴う認知的変化	
1週間	身体変化の受け止めに関して混乱が生じる <sup>6)</sup> 。身体カセクシス(身体のこだわりの異常)について、乳房温存や再建術を受ける患者は、身体への意識の集中やこだわりの異常がある。身体尊重の維持(自分自身の身体に対する価値判断)について、有職者、温存術又は再建術を受ける群は、身体尊重の感覚を持ちにくく、また有職者は、身体に対して不満を抱きやすい。身体コントロール(自分の身体をうまくコントロールできているという感覚)について、特に有職者は、コントロール感低下や不安を抱きやすい。また若者は、自身のボディイメージの変容にマイナスイメージを植え付けており、機能的にも外見的にもコントロール感を持ちにくいといえる <sup>4)</sup> 。
看護援助	
1週間	気分転換活動などにより、意識が過度に胸部に集中しないよう、背景にある不安や疑問を的確に捉え、対応していく。患者が自分のペースで社会復帰できるよう、行動範囲の拡大を示唆したり、患者の役割の喪失や社会に出ていくことの不安などを傾聴し、共感したりすることで心理的不安定を支え、前向きな思考を支持する。退院後も自身で身体をコントロールできるように、身体の変化の訴えを傾聴し、リハビリテーションや補正具などコントロール方法について情報を共有し、指導する。自身の身体があるがままだに受け止め、自己を尊重して生きることが支える <sup>4)</sup> 。

1 週間	術後では自分らしさが失われたような感覚に陥るため、回復状況の説明やリハビリテーションでの関わりを通じて、自分らしさを実感できるような援助を行う。退院後は医療者が傍にいない不安と、自分の身に何か起こるのではないかという不安が生じてしまうため、入院中から退院後の生活を見据えた退院指導を実施する <sup>9)</sup> 。
退院後	趣味、家庭、職業などの生きがいを持ち、活気がある状態で退院後の生活を送るために、患者が前向きになれるきっかけをつくる援助を行う <sup>9)</sup> 。
2 か月後	自己の価値観や女性としての価値観を否定的に捉えている時期は、それを表出できるようじっくりと話を聴き、受け止める姿勢を持つ <sup>9)</sup> 。ボディイメージの変容やそれに伴う感情の変化を家族が受け止められるよう、情報収集し、家族の状態を把握する。また家族を交えて説明を行い、チームで共に考えていく <sup>7)</sup> 。知覚の違和感や浮腫を訴える患者に対しては、原因や時間と共に改善していく可能性があることについて説明する。また補正具やリハビリテーションによって、日常生活に適應していけるようにするなど、改善策を共に考える <sup>4)</sup> 。乳腺疾患患者会の紹介や説明を行う。「がん相談窓口」などで患者の相談、不安、疑問を傾聴し、患者の生活背景や価値観に合わせて、患者と共に対応策を考え、サポートを継続していく <sup>9)</sup> 。

### 考察

ボディイメージの変容に伴う身体的変化については、自分自身の身体を受け入れる過程や、創部周囲の知覚の違和感による不安や混乱により自分の体ではないような感覚が術後1週間から2か月以降にも続いている。そのため、「(乳房が)失くなるのね。」「引っ張られる感じが残っている。」<sup>4)</sup>という発言がみられる患者は、自分の体ではないような感覚が生じている。看護師はいち早く患者の言葉や身体的変化に気づく必要がある。

ボディイメージの変容に伴う心理的变化については、術後1週間から2か月以降にも、身体や日常生活での変化に伴い、不安や混乱が続いている。術直後に「まだ傷を見ることができない。」<sup>4)</sup>という自己の変化を認めることができない発言や、退院後に「友達から旅行に誘われても気を遣わせるのが嫌で…」<sup>2)</sup>というように以前の生活では気にならなかったことが気になるようになる発言があった。このように、術直後から不安や混乱は生じるが、日常生活と向き合うことによって術直後よりも、心理的ストレスが大きくなるといえる。

ボディイメージの変容に伴う認知的変化については、術後1週間には特に、身体への意識の集中やこだわりの異常が生じる。この要因として、「乳房は、女性にとって女らしさの根本や望ましい性のあり方、そして母性的な安寧…とみなされている。」<sup>8)</sup>と言われており、実際の文献から「場所が場所だけに複雑な気分」「(子宮がんより)乳がんの方が嫌だと思った。女だからね。」<sup>1)</sup>「年をとっても女なんだね。寂しさを感じる。」<sup>4)</sup>という発言から、認知的変化が起こる(表1参照)。また、「術直後は侵襲に伴う生体反応が活発に作用し、疲労感が強く、認知、思考、感

情など心理的活動は低下している。」<sup>9)</sup>ことから、自己の存在の再認識や回復への希望に関心を向けられるような援助が必要である。

ボディイメージの変容の相互関係について、本研究ではボディイメージのアセスメント項目については、身体・心理・認知的変化は複雑に関わり合っており、明確に分類することは困難であった。手術を行うことによる身体的変化に伴って不安や混乱などの心理的变化や、身体への意識の集中やこだわりの異常などの認知的変化が起こると考える。

看護援助について、退院後の外来通院では、関わる時間が限られるため、患者の身体・心理・認知的変化を捉え、個別的な看護援助を実施することは難しい。そのため、看護師が密接に関わることが可能である入院中に、患者の変化を把握し、看護師一人一人が患者のボディイメージの変化に伴い、必要となる看護援助の意味を理解し介入する必要がある。

### 研究の限界と課題

現在、乳がん患者のボディイメージに関する研究数は少なく、看護援助について具体的な行動レベルで述べられているものは見られなかった。したがって、今後は乳がん患者のボディイメージに関する看護援助についての研究を行っていく必要がある。

#### 引用文献

- 1) 国立がん対策情報センター：最新がん統計，[http://ganjoho.jp/reg\\_stat/statistics/stat/summary.html](http://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html) (2017.11.22)。
- 2) 砂賀道子，二渡玉江：乳がん体験者の自己概念の変化と乳房再建の意味づけ，*Kitakanto Med J*, 8, 377-386, 2008。
- 3) 谷野多美子，山田和子，森岡郁晴：成人前期の術後乳がん患者のQOLの実態とそれに関連する要因，*日衛誌 (Jpn. J. Hyg)*, 1, 163-172, 2016。
- 4) 齋藤英子，藤野文代，越塚君江：乳がん患者の術前・術後におけるボディイメージの変化に応じた看護援助，*Kitakanto Med J*, 52, 17-24, 2002。
- 5) 小島操子他監訳：がん看護コアカリキュラム，医学書院，43-45, 394-410, 2010。
- 6) 萩原英子，藤野文代：乳がん患者のボディ・イメージの変容と感情状態の関連，*Kitakanto Med J*, 59, 15-24, 2009。
- 7) 縄弥生，伊藤幸江，阿部悦子，阿部美和子，柴崎洋美：乳がん術後患者の退院後生活に必要な援助についての検討—インタビューを通して—，第42回(平成23年度)日本看護学会論文集 成人看護I, 103-106, 2012。
- 8) MAVE SALTER：前川厚子訳：ボディイメージと看護，医学書院，209-222, 1992。
- 9) 上田雅代子，関美奈子，竹村節子：乳癌患者の術前・術後の心理的状況の分析，和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要，第5巻，19-25, 2002。

#### 参考文献

- 1) 赤嶺依子，具志堅美智子：乳癌術後患者の不安対処行動の関連性—STAIとCISSによる検討。母性衛生，42(5)，798-805, 2001。
- 2) 柴木実枝監：見えてくる臨床ケア図鑑 癌看護ビジュアルナラシグ，344-345, 2015。
- 3) 大西和子編：がん看護学—臨床に活かすがん看護の基礎と実践—，ヌーヴェルヒロカワ，149, 2011。
- 4) 厚生労働省：平成27年人口動態統計の概要，<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai15/index.html> (2017.11.22)。
- 5) 作田朋加，畔蒜さとみ：乳癌術後患者が求める看護とは—外来通院中の患者に対する面談調査より。乳癌の臨床，17(6)，596-597, 2002。
- 6) 福田護他編：これからの乳がん診療2016-2017，金原出版，2016。
- 7) 藤崎郁：ボディ・イメージ・アセスメントツールの開発。日本保健医療行動科学会年報，11, 178-199, 1996。